僕らの自由　僕らの青春６　Night of a certain new moon

シルヴィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕らの自由　僕らの青春６　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ａ　ｃｅｒｔａｉｎ　ｎｅｗ　ｍｏｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ６８１３Ｏ

【作者名】
シルヴィ

【あらすじ】
ある日の夜、俺はダッフルコートを着た少年に出会った。
少年は君を守りたいと言うが、俺はこの少年を知らない。
お前は、誰だ？

ダッフル少年の出現

「キョン君～半紙買ってきて～」
妹が涙目で俺にパシリをさせたのは夜９時ごろだろうか。どうやら明日、習字の授業があるのに、うかつにも半紙を切らしていたらしい。ぬくぬくとベッドに入った妹の変わりに、優しい兄が震えながら自転車で深夜営業のスーパーへ。半紙とついでに母親に頼まれた牛乳と卵を買って店を出た。人気のない道でひたすらペダルを漕ぐ。すると自転車のライトが歩行者を捕らえた。普通に「歩行者」なら俺も素通りしただろうが、そいつは「普通の歩行者」ではなかった。少なくとも俺はそう思った。
そいつは真っ黒なダッフルコートを着て、フードを目深に被っていた。最も近くを俺が通り過ぎたとき、その歩行者は手袋や靴までが真っ黒だった。そんな黒い塊が所在なさげに歩いていたが、俺がそいつを抜き去ろうとした瞬間だった。
「やっと会えたね、キョン。」
口元だけがニヤリと笑った形になっている。
「な！」
なぜ俺が「キョン」だと知っている？やっと会えた？俺、お前とは初対面だぞ。
「待て！」
俺は追いかけようとしたが、そこで信じがたい景色を見るはめになった。謎のダッフルコートはまるで夜の空気に紛れるように姿を消した。どういうことだ。いや、追及よりも安全確保だ。全力でペダルを漕いで帰宅する。段差がある道もそのままの勢いで自転車を走らせたので、卵が割れてないか気になったが、幸いにも健気な卵たちは、全員耐えてくれた。
無事ミッションを果たした俺は風呂で体を温めた後、謎の黒詰めについて推理を開始する。黒の組織？黒の騎士団？笑い男？万事屋銀

？　ジオン軍の斥候？いや、連邦軍か？あるいはコエムシ？荒川の橋の下の連中？どれも違うね。ダッフルコートは俺を見てはっきり「キョン」と言った。俺は知らなくても向こうは俺のこと、少なくとも俺が「キョン」と呼ばれていることを知っているということだ。

「やっと会えたね、キョン」

あの声は俺のデータファイルに保存されていない。気色悪い、怖い、だけど、悲しい、寂しそうな声。少年の声だということは、はっきりわかるが、それ以上はわからない。

いや、ちょっと待て。あの消え方、まるでＴＰＤＤによる時間移動とそっくりじゃないか。もしかしたら新手の未来人か？未来の俺の知り合いか？未来の俺か？まさか未来からやってきた俺の孫の孫とかじゃねぇだろうな。

翌日から、ダッフルコートは時間を問わず毎日俺の隣に現れるようになった。それも一瞬現れてはニヤリと笑ってどこかへ去って行く。俺はダッフルコートをストーカーと断定させていただくことにした。今までの俺なら、翌日には長門か古泉に助けを求めたに違いない。だが、毎回何かあるたびに、アイツらを危険な目に合わせるのも申し訳ない。たまには俺１人で解決してみようじゃねぇか。単なるストーカー少年であれば、危険と判断した段階で警察に行けばいいだけだ。よし。まずは、そいつの体格や年齢を推定してみよう。今日のストーカー少年は、あろうことか自宅の前で笑って待っていた。おかげで相手について観察することはできた。

身長　俺よりも低い。１６０センチ前後　体格はコートに隠れて不明

年齢　多分中学生以下。高校生ではない。

だが、俺には小学校に妹の友達、吉村美代子、通称ミヨキチという知り合いはいるが、中学校に知り合いは全くいない。

「キョン！」

ストーカー少年は、はっきりと俺を見てそう言った。不意に背中に寒気が走る。あのストーカー少年の目的は俺じゃなくて妹じゃねぇ

だろうな。妹は常に、兄である俺を「お兄ちゃん」じゃなくて「キョン君」と呼ぶ。それで俺の名前を知ったのか？いいや、違うな。妹が目的なら、最初から妹を狙うはずだ。やっぱりストーカー少年の狙いは俺だ。

携帯電話の着信メロディが鳴り響く。この音は、ＳＯＳ団でも北高関係でも家族や親類でもない電話。しかも非通知ときた。

「はい。」

「キョン、まだ起きていたんだね。」

「誰だ！いったい、てめぇは誰なんだよ！何で俺につきまとう！」

「キョンを守るためだ。つきまとうなんて言わないでほしい。」

「いい加減にしてくれ。何が目的だ。」

「さっき言っただろう。君を守りたい。ただそれだけ。」

「余計なお世話だ。断る。断固辞退する。自分の身は自分で守るから結構だ。」

「もし、襲ってくる相手が人間以外の怪物でも大丈夫？」

「は？怪物って、どういう意味だよ、おい。」

おい、いったい何なんだよ、このストーカー少年。俺の周囲に人間外の奴らがいることを知っているのか？だとしても、なぜお前がそれを知っている？答えは簡単。「ストーカー少年」だからそのことを知っているんだ。俺のことを、ヤツは、なんでもかんでも知っている。冗談じゃねぇ！

「僕はキョンを守るためだけにいる。明日は新月だ。気をつけて。」

そう言って電話は切れた。おい、ストーカー少年。新月だからって、何に気をつければいいんだ。せめてそれぐらいはっきりしてから電話を切れ。そして二度と俺の前に現れるな。

翌朝、俺の願いも虚しく、ストーカー少年は光陽園駅の改札口に立っていた。確かのこの時期、朝晩は寒い。だが冬嫌いの俺でも、あんな厚手のダッフルコートはまだ着ようとは思わん。俺は目を合わせないように、他の北高生に紛れて歩いていた。だが、まるでスト

ーカー少年は長門ばりの瞬間移動で俺のそばにやってきた。
「おはよう、キョン。」
「学校までくるな。お前は何なんだ？」
「昨日も言ったよ。キョンを守るって。」
「だーかーら。お前の名前は？住所は？中学に行かなくていいのか？」
「うん。今日だけはね。君を守るためにも、今日は学校には行けない。」
「結構だ。さっさと学校に行け。」
「君の周りには人間じゃない連中が４人もいる。何でも思い通りにできる神様のような女の子、未来からきたマスコット、宇宙人の無口な文学少女、超能力が使える謎の転校生。今日は新月だから、誰かが君を襲うかもしれないよ。」
「うるさい！いい加減なことを言うな！」
俺の大声に周りの生徒が振り返る。さっきからおかしいと思っているのは、何で皆、俺の方を見てるんだ？俺を見る前にこの黒ダッフルのストーカー少年を不審に思わないのか？
それにこいつ、何でＳＯＳ団の連中のトップシークレットを知っているんだ？
「本当でしょ？僕はキョンのことはよく知っているよ。」
「黙れ。俺についてくるな。これ以上ついてきたら通報するぞ！」
「おい、キョン。さっきから何１人しゃべりしてんだ？」
「谷口！ひとりしゃべりってどういうことだ？」
谷口は俺の肩を叩いてしみじみ口調でしゃべりだした。
「あーあ、とうとうその時がきちまったんだなぁ、キョン。俺は東中出身者として常々忠告してきたが、ついに涼宮ウィルスにやられたな。可哀想になぁ。」
「キョン、大丈夫？もしかしたら、熱でもあるの？今日は家に帰ったほうがいいと思うよ。」
谷口と国木田は、真っ直ぐに俺をみて話しかけてくる。おい、俺の

横にいるストーカー少年が見えねぇのか？このダッフルコートが見えねぇのかよ、おい！
「ストーカーだよ！こいつは俺をストーカーしてやがんだ。だから必死で追っ払ってるんだよ！」
「は？お前、いくら涼宮に疲れたからって、空気彼女作ることねぇだろう。」
「キョン、悪いこと言わない。今日は帰りな。」
マジで俺のことを心配する2人。どうやら2人にはストーカー少年が見えていないようだ。いや、谷口と国木田だけじゃねぇ。他の連中にも見えてない。要するこいつは俺にしか見えないストーカー少年らしい。一体どういうことだ？また何かが起こるのか？
「遅刻する。早く行こう。」
不本意ながら俺は、俺にしか見えないストーカー少年を連れて学校へ行くことになった。そしてストーカー少年は学校が近づくたびに「殺気」めいたものを発散させていく。一体何が起こるというのだ？第一、俺に危険が及びそうなら、長門か古泉のどちらかが俺に忠告にきてくれるはずだ。そもそも、あいつらが、ノーリアクションであること自体、俺は怖い。まさか2人して俺を罠に嵌めようとしているのか？長門の親玉と「機関」が総力を挙げて俺をつぶしにかかっているのか？
そして、こいつは「俺を守る」とか言っているが、本当は未来から来た暗殺者じゃねぇのか？
「キョン、仲間を疑ってはダメだよ。」
今、ストーカー少年に心の中を読まれた？

ダッフル少年の奮闘

「大丈夫。仮に仲間が襲ってきても僕が守るから安心して。」
そしていつものように時間は過ぎ、放課後を迎えたが、ＳＯＳ団の連中に変化はなかった。長門はいつもどおりの指定席で読書にふけり、古泉は相変わらずチェスで連敗記録を更新する。古泉よ、お前はチェスのプレイヤーより、黒い燕尾服を着て、黒のナイトを手に持ってニヒルに笑っているほうが絵になるぞ。あっというまに、某伯爵家の某万能真っ黒執事のできあがりだ。
朝比奈さんはいつもどおりメイド服でお茶を出して下さり、ハルヒは団長席でネットサーフィン。長門が本を閉じたときには、すでに空の半分が夜になっていた。携帯で調べると、確かに今日は新月だ。月光がない分、星がやたらと綺麗に光っている。確か、新月の日は月明かりに邪魔をされないから、天体観測に一番向いていると古泉が言ってたような気がする。
「すごいね、キョン！まるであの部屋だけが異世界になってるね。」
「黙っていろ！」
「でも、あの人たちがキョンを襲ってきたら、勝てる自信あるの？」
う、痛いところを突きやがった。
「全く、ない。」
「新月の夜は恐ろしいよ。だから僕はキョンを守るためにここへきた。」
「もういい。静かにしろ。」
俺はたまりかねて俺にしか見えないストーカー少年に声を張り上げた。
「ん？」
ストーカー少年がいない。どういうことだよ！今日は「何か」あるから俺の隣にいたんだろうが！どこ行きやがった！
「こっちだよ。キョン、こっちおいで！」

「いい加減にしろ！」
俺は思わずカッとなって坂を駆け上がった。すると背後で何かが何かに激突した音が炸裂する。４秒ほど空白の時を過ごして、ゆっくり振り返ると、さっきまで俺が立っていたところにクルマが民家に突っ込んでいた。
「う、うそだろ…？なんだよ…あれ…。」
ひざが震えて路上に座り込んでしまう。今、こいつが注意を引かなければ、俺は間違いなくクルマと民家にサンドイッチにされて、確実に死んでいた。ああ、そうさ。そうだよ。ストーカー少年が犬を呼びつけるように俺を呼んでいなければ、あの瞬間、俺の人生は終っていたんだよ。
「大丈夫？」
「お前…これがわかっていたのか？」
「うん。」
「俺を、守って、くれたんだな。」
「そう。僕はキョンを守りたかった。だからこうした。」
俺は命の恩人を呼び、ダッフルコートのフードに包まれた頭を撫でてやる。
「ありがとう。今まで悪かったよ。ストーカー少年なんて言って悪かった。本当にごめんな。」
「別にいいよ。僕はキョンが無事ならいい。でも油断しないで。新月の夜は始まったばかりだからね。」
「ああ。」
駅前の駐輪場についた瞬間、ストーカー少年改めダッフル少年が俺のブレザーを引っ張った。
「今日は自転車に乗らないで。押して歩いて。」
「結構、駅から家まで距離あるぞ。」
「お願いだから、今日だけは乗らないで。僕と一緒に歩いてほしい。」
しょうがねぇなぁ。歩いて帰るのは時間もかかるが、今夜が危険と

いうのであれば、ダッフル少年が「乗るな」というならば、そうしよう。俺は「歩いて帰る」なんて、逆に危ないような気もするが、命の恩人が「歩け」というなら言うならそうしよう。
「なぁ、お前、やっぱり名前教えてくれないのか？命の恩人の名前ぐらい俺は知りたいぞ。」
「ごめん。でも僕を信じてくれるから、本当は教えないと、いけないよね。」
「お前、まさか、異世界からやってきたとか言うなよ。」
「異世界、か。あはは、それも面白いな。」
黒いフードが少年らしい笑い声とシンクロしてかすかに揺れる。
「ねぇ、キョン。君は「ジョン・スミス」って知ってる？」
俺の世界が、時間が凍りついた。
「ジョン・スミス。」
「なぜだ。なぜ、お前がその名を知っている！それは、それは！」
「君がキョンであり、ジョン・スミスであること。それと、僕は君に嫌われようとも、今日の新月から君を守り抜くのが義務であることを「分かってしまった」んだよ。」
俺の体内を走っていた血液が一気に引力に導かれて地面に吸い取られそうになる。
「なぁ、少年。お前はいったい何者だ。」
俺は、改めてダッフル少年に尋ねた。ダッフル少年はフードがちゃんと下りて、俺に顔が見えない状態になっていることを確認して俺のほうに体を向ける。
「僕は「世界を大いに盛り上げるジョン・スミスをよろしく」という言葉が忘れられなかった。」
俺はダッフル少年に視線を固定させたまま5秒ほど反応ができなかった。落ち着いて考えれば、近辺の住宅の子供、あるいは、たまたま通りすがった塾帰りの子供が、あの恥ずかしい掛け声を聞いていることは充分あり得るこ。だが、ダッフル少年は俺に正体を明かさず、しかも誰にも見つかることなく、ここにいる。わからない。正

体を明かさないことは一億万歩譲っても、こいつは俺以外の人間には見えない。宇宙人にも未来人にも超能力者にも神様にも見えない不思議な少年。
「説明しないといけないけれど、少しでも時が満ちる前に、無事に君を家に帰したい。」
「時が満ちる？」
「うん。キョン、新月の夜には魔物が出るんだ。心の闇が魔物になるんだよ。」
「普通、魔物が出現するのは満月の夜じゃねぇのか？」
「まぁね。でも君が危険な目に合うのはむしろ新月の夜。月光がない夜にジョン・スミスは狙われる。」
こいつはどこまで俺のこと、ジョン・スミスのこと、そして涼宮ハルヒのことやＳＯＳ団メンバーのキテレツ属性を知っているんだ。まさかと思うが、朝倉涼子がリベンジのためにダッフル少年に化けてるんじゃねぇだろうな。
「ほらね！」
ダッフル少年の右ひじが背後にいる暴漢の腹にヒットした。さほど大柄でもない少年のエルボースマッシュは見た目より、相当ダメージが大きかったらしく、暴漢は地面に倒れて呻く。少年は倒れた暴漢の腕を掴んでもう一度腹部に蹴りを入れ、腕を捻る。骨が折れる音を聞きたくない俺は、耳を手で塞いだ。別に俺のことを「キョン」ではなく、チキンと呼んでくれてもいいぜ」、少年。
「キョン！ごめん！」
少年は俺の自転車を放り投げる。暴漢の仲間とおぼしき男の強烈な断末魔の声が響きわたり、地面に倒れた暴漢の腕をすかさず捻る。やがて周囲は、月のない夜に星だけが輝く闇夜に戻る。ダッフル少年の少し荒くなった呼吸音が響き、吐き出される息は白い影となって踊っていた。
「大丈夫？キョン。ケガはない？」
「ああ。大丈夫だ。お前のおかげでケガはない。」

「自転車、ごめんね。」
「どうってことねぇよ。ちゃんと動くし、パンクもしていない。しかし、お前マジ強いな。でも相手の腕まで捻るのは、ちょっとやりすぎだぞ？」
「あれぐらいしておかないと、また襲ってくるよ。あいつらが襲わなくても、別の人間を宿り木にして闇は襲ってくる。」
俺はそのとき、ある男の名前をダッフル少年に言おうかどうしようか迷った。どこかで訓練されたような強さ。とっさに自転車を投げて暴漢を撃退する機転。俺には心当たりがある。何となく仕草も似てないことはない。この少年は、ダッフルコートを着せてフードを目深にかぶらせたエスパー少年、古泉一樹の縮小コピーに見えないこともない。しかし、ダッフル少年の正体なら「ジョン・スミス」の名前をアイツは聞いてしまったことになる。だが、古泉は俺が打ち明けるまで「ジョン・スミス＝キョン」という事実を知らなかった。何か矛盾していないか？アイツは「転校生」であるが、それは北高へ潜入するための口実であり、実はこの近辺の住民で、しかも東中出身。違う高校に進学してまで、わざと転校生を装い北高にやってきたというのか？
「違う。僕は超能力者の彼じゃないよ。それに彼は君が「ジョン・スミス」を名乗った頃、別の場所にいたはずだ。」
「おい！何でお前はそこまで知っている？答えろ！」
俺は思わずダッフル少年の胸倉を掴んだ。
「だって、今日の君はヒマさえあれば、彼と僕を比べていた。何となく僕が彼の一部じゃないかと思い込んでるような気がしたんだ。」
うっ、そこまで読まれていたか。
「それに、彼は転校生なんだろう？だったらここにいる訳がないよ。どっか「別の場所」にいたに決まっているじゃないか。」
別の場所？場所？ああ、俺の勘違いだな。てっきり「別の場所」は「閉鎖空間」のことだと思ったが、単純にこの町ではない、どこか別の町とダッフル少年は言いたかったらしい。ごめん、俺、実は日

本語苦手でさ、こないだの小テストも散々な結果だったんだ。
「離して、キョン。痛いよ。」

ダッフル少年のバイバイ

「悪かったな。」
「キョン、落ち着いて。君は僕のことを信用できないと思うけど、僕は君を信じている。必ず守る。」
ダッフル少年が顔を上げるが、口と鼻以外はやはり見えない。だが、俺を守ろうとする純粋で強い意思が俺に伝わってくる。だけど、この少年はなぜそこまでして俺を守ろうとしているのだろう？理由がわからない。もしかして、終わり無き夏休みに何度も何度も捕まえたセミ。必ず、最後は逃がしてやった。そのときのセミが恩返しにきたのか？まさかな。俺にはセミがそこまで複雑怪奇な技を使い、成人男性をエルボースマッシュ一発で地面に沈めて腕を捻り、俺には見えなかったもう1人の暴漢に自転車を投げつけるなんて大技、世界中のセミさんには大変申し訳ないが、俺は「セミの恩返し」説は否定させていただく。だからといって、他に恩返しをしてくれそうな相手を思いつかない。本当にこのダッフル少年は何者なんだろう。

その後、俺は「こいつがいなければ死んでいた」場面を何回か潜り抜けて、ヘトヘトになって自宅に到着した。ヒットポイントはかなり減っているが、確かに俺は生きて帰宅できた。
「最後のお願いだ、キョン。」
「何だ？」
「…今日はお風呂じゃなく、シャワーにして。2階へ一度上がったら朝まで下りないでほしい。」
「わかったよ。風呂で溺死も階段で転落死もゴメンだからな。」
「じゃぁね、キョン。また会えたらいいね！」
「おい、少年！家に帰る前に、お前の名前を教えてくれよ！」
ダッフル少年の口元がはっきりと笑っていた。きっとフードに隠れ

ている目も笑っているんだろうな。
「世界を大いに盛り上げるジョン・スミス！！」

その次の新月の日、俺の前にダッフル少年は姿を現さなかった。未だにダッフル少年の素性は名前も含めて全くわからないままだ。俺は新月の日が来るたびにダッフル少年を探したが、季節が冬に変わり、ダッフルコートが相応しい季節になっても、会うことはできなかった。そのかわり、新月の日に限って言えば、他人に襲われることや、命を落としそうになる場面に出会ったことはない。
なぁ、ダッフル少年よ、名前ぐらい教えてくれてもよかっただろうに。お前は、俺の命の恩人だぜ。いつまでも「ダッフル少年」と呼ぶのはお前に申し訳ない。
だけど、お前は最後まで名前を言ってくれなかった。余程の理由があるのだろう。俺だって、ハルヒに
「ジョン・スミス」なんて少なくとも今は、口が裂けても言うことはできない。それと同じだ。

これ以上ダッフル少年の名前を追及することはやめよう。ダッフル少年は「ダッフル少年」でいいじゃないか。何にしろ、俺がこうやって生きているのはダッフル少年のおかげでもあるんだ。わざわざ調べることもあるまい。たまたま、俺はダッフル少年にストーカーされた。そのダッフル少年は新月の夜、俺の命を守りきり、あんなことを言い残して俺の前から消えた。
それだけの話だ。それだけの話なんだけどよ…。やっぱりつれないぜ、ダッフル少年。もう一度ぐらい会いにこいよ。俺にきちんとお礼を言わせてくれ。お願いだ。

俺と「ダッフル少年」の危険で摩訶不思議な新月の夜、またいつか会えるといいな。今度あったら、是非とも名前を教えてくれ。今度は一緒に遊ぼうぜ、俺の大事な友達、命の恩人。「キョン」も「ジ

ョン・スミス」も、もう一度お前に会いたいと思っている。思いっきり歓迎してやるよ。俺のキテレツな仲間も紹介してやる。みんなで遊ぼう。いつでも俺に会いに来てくれ！待ってるぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6813o/

僕らの自由　僕らの青春６　Night of a certain new moon

2010年11月3日08時21分発行